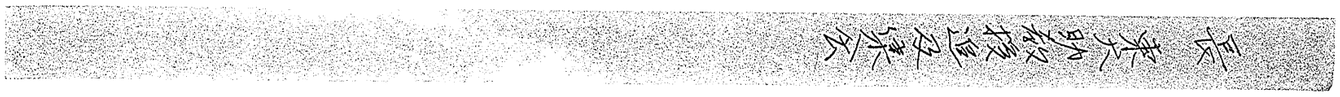
琉球大学学術リポジトリ

米国管理下の南西諸島状況雑件　沖縄関係（毒ガス問題）第一次移送(4)

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2019-02-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43780



取扱注意

大臣
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長
官房総務参事官
官房書記

軍縮室長
安全保障課長

アメリカ局長
参事官
北米オ一課長

ONTA、陸幕方（鈴木渉外参事官および陸幕化学課へ）

総合長官へ報告ずみ（2/8 加藤北米局長に対し安全確認のため安全確認方法と学長保証方）

長東京大学助教授
追及集会

46. 1. 21
米北一

1. 今般の沖縄毒ガス搬出に際し、日本政府派遣調査団の一員として右毒ガス搬出作業の安全性確認を行なった東京大学工学部の長助教授は1月21日（東京）~~大学工学部~~の全共闘系学生の要求に応じ、~~同大学~~工学部5号館52号室において（長助教授の事前了承、北米局課長の傍聴せしめた。）開催された"長追及集会"に出席したが右集会における同助教授の発言概要

は次のとおり。　御参考まで。

（なお、琉球調査団の一員として参加した森 農学部助手も同席し、学生とともに、長助教授を追及した。）

（参加人員；約100名、主催；沖縄青年委員会）

(1) 自分（長助教授）は、沖縄の毒ガスの1日も早い撤去が沖縄住民のために望ましいことであると考え調査団に加わったのであり、米軍より資料の提供をうけ、実施に際し弾薬庫に立ち入って調査したが、自分の知識に基づき毒ガス搬送の技術的側面は安全であると判断した。

(2) 今回の調査団出発に先立ち、自分は外務省の軍縮室長より予備知識を得、沖縄の外務省の出先機関より毒ガス事故の例を2、3聞いた。

（注：同助教授は化学兵器禁止問題に関して軍縮室に協力して来た経緯はあるが、軍縮室長が沖縄の毒ガス問題につき予備知識を与えた事はない。）

(3). 催涙ガスは搬出されないと聞いている。なぜなら軍事分類上催涙ガスは化学兵器ではないからである。（発言後、学生の激しい詰問にあい、個人的には催涙ガスも広い意味では毒ガスの一種であり搬出されることを願っている と付言した。）

(4). 住民地帯を通らない毒ガス搬送路の建設は可能であり、又建設はされるであろうと思う。

(5). （何故自衛官と同行したのかとの向に対し）同行した防衛庁の阿達二佐は4年前米国で6ヶ月間化学防護の訓練をうけ、また甘利三佐は1～2年前やはり米国

で訓練をうけ、現在は化学中隊に所属し教官の職を務めている。沖縄へは外務事務官という資格で出張したものである。

2. なお同集会は午後2時半より7時半頃まで行なわれたが、21日夜半長助教授より学生数名、内田教授の連絡によれば、~~同助教授は何らコミットメント あるいは確認を行なわずに~~（自衛官とともに「日米合同化学作戦」に参加したことを~~切り抜けたつもりである由。また、琉球政府招請調査団に加わった東京大学~~認めて、自己批判するならば帰宅を許すなどと述べた由）~~農学部の森助手も追及側に立ち、学生とともに（かなり）激しく長助教授を追~~（であるが、）~~及していたが~~長助教授は「自分は沖縄住民のため良かれと思って安全性の

確認をしたのであり、~~自衛官と一緒に沖縄で日米合同化学作戦に加担した~~

~~という如き~~ かかる「自己批判は出来ぬ」との立場を貫ぬき、政治的な面に亘る発言は避け、~~ない~~ 行うコミットメントあるいは確認を行なわずに切り抜けようとしたものと考えている由。

3. 又 同助教授に対し、本件紛糾に関する調査報告書を提出せよというが如き要求はなされなかった由。

4. ~~御参考までに~~ 右集会において配布されたビラを別添~~します~~のとおり。

5. なお、後刻 長助教授 より の電話 連絡によれば、同助教授が帰ったあと一部学生は助教授の研究室を捜索し、書類等を破損する行為にでた由（1月22日現在被害程度は確認されていない。）

（大学側からの届出がない――長助教授は22日登校せず――のため）

（注）なお、長助教授の身辺警護については、当課より、警察庁警備一課高野管理官に要請を行ない、同管理官は21日ただちに本富士署に連絡の上、同署をして東大の管理責任者と接触せしめ状況の把握に努める一方、自己署に連絡して長助教授自宅（豊島区南長崎5-15）附近のパトロールを連絡を21、22の両日強化する措置をとった。高野管理官よりの連絡によれば、22日22時現在自宅附近に異常ない由である。

別添

公開質問状

長哲郎助教授殿

今回の米軍の毒ガス移送の強行は、沖縄現地をはじめとして、われわれ東京に住む沖縄人によって組織されている沖縄青年委員会にとっても切実な問題でありました。その一つ一つのなりゆきは身を切られる思いで見守りつづけてきました。とくに米軍とあなた方日本政府側の調査団の言動をニュースで知るたびはげしい怒りをあらたにすることができませんでした。

思いおこせば、われわれ琉球沖縄は島津の侵入いらい人間としての権利そっぱわれ、そして明治政府の御沖縄支配はまさしく同民族による支配でしかありませんでした。あげくの果ては、第二次世界大戦では、スパイ呼ばわれされ、集団自殺を命ぜられ、軍人を上まわる民間人の死者を出した。

一九五一年、日本国民には無視され、沖縄はその意に反し、米軍の支配下におかれ、すべての権利そっぱわれ、われわれの、空、海、山、土地、水、あらゆるものまで米軍にとり上げられ、今、空気までもとり上げられてしまっています。その米軍支配後、われわれの私利はわれわれの手で一つ一つ取りかえしてきました。それは正に血を流す毎日であったのです。しかしあなた方日本の学者の大部分ば、その責任の一端すら感じず、日本政府からおすりうけた沖縄の基地を利用し、アジヤの人々を殺害、侵略し、沖縄から毎日大量の毒ガスを運搬し、アジヤの各地に送り出され、又われわれ沖縄人の知らないうちに、あらゆる兵器を持ち込まれました。

米軍の沖縄での犯罪はとりあげればきりがないが、ここに毒ガスに関係すれば、一九六五年三月、宣野座村に住む神山さんは防毒面をしたまま兵に会い毒ガスを運搬を行ったが、米軍の補償は一セント も受けることの治療費をかけ、又医者に一年の労働禁止の注意を受けたが、その安全性においても できなかった。当時の外電によると、ベトナム戦争で本格的に化学兵器、毒ガスが使用されます。

五年の初夏、沖縄から出動した部隊で、ある日、朝七時頃、小学生が海水浴で皮膚をあかさ六七年、五月毒ガス納入でサツマイモが枯れ、同年、七時頃、忠門地区で、小学生が海水浴で皮膚がまいっていたとある。米軍機密軍機密法を名目されて、十一本足のカエルが発見され、ふしぎな事件がおきた。米軍機密軍機密法を名目に事実をかくしてきたが、六九年七月、VX神経ガスの搬出事故があり、われわれ沖縄人の目前でも演習するという危険な行動をしてきました。

毒ガスは、ナパームのアイシエビ、ツで悪名高いのはご存知のとおりです。しかし貴方はこのことを日本政府側の唯一ブ議定書は、毒ガス、細菌性兵器の製造使用、貯蔵の禁止を宣言しています。したがって米軍の毒ガスの使用、貯蔵は、いかなる名目をもっても正当化されるものでなく、又、その安全性においても保証されるものではありません。これまで述べて来た事実だけでもはっきりしています。

しかし、はじめて沖縄の毒ガスの危険性を本当に改革したのは、残念ながら、今回、沖縄の毒ガスを安全だと説いた貴方方日本の学者ではなく、米国に留学している一学生で、オレゴン大学の講演で知り屋良主席に手紙を送ったことからであります。同留学生の送った米国の新聞によると、米軍の毒ガス移送計画のくわしいレポート・レッド・ハットは米本土で憲法違反だと報じています。

米軍が沖縄支配していることじたい不法であるにもかかわらず、毒ガスを持ち込み、その責任すらとらず、沖縄の人々を避難させることはもっての外であり、その指導をした貴方は、米軍にとっては働労者かも知れませんが、われわれ沖縄人にとっては、歴史的な犯罪者と言わざるを得ません。

しかも今回の移送は、ほんの一部にしかすぎず、残された毒ガスの移送先は現在のところ一つもありません。したがって今回の移送は、米軍の毒ガスの犯罪性を追求する世論をごまかす政治的なシアであることは外人記者も指摘している通りであります。しかし貴方はこのシアを日本政府側の唯一の犠牲者として直接に責任を負わされることは、貴方のがわうけ意志でなかったとしても、その結果は、われわれは許すわけにはまいりません。それはかりでなく、戦争によって沖縄の歴史はじまっていらい、の死者を出し、日本のどこよりも大きな被害を受け、戦争を二度とくりかえすまいとする沖縄人、貴方は、旧日本軍より強力な自衛隊の高官と、米軍を海兵隊を撤去させるために渡ったことは、もはや一学者でなく、沖縄に軍事優先を説きにきた大政治家であり、われわれ沖縄人にとっては、私たちの日本人がたしかに、振興開発を今回とった行動を反省し謝罪することを要求し、二度と今回の行動をしないことを同時に要求し、この公開質問状の回答をすみやかに、あらゆる方法と手段で、全国民、全沖縄人に知らせるよう、あなたの最高学府の教授として又学者として良心に訴え、誠意ある回答をたまわりたく存じます。

一九六一年一月二十一日

東京大学工学部助教授
長哲郎殿

沖縄青年委員会

別添

長を毒ガスと共に葬り去れ!!

先日、沖縄の毒ガス移送に際して、応化学助教授の長哲郎は本土政府調査団の一員として「安全性」なるもの確認し、沖縄人民の戦斗的斗争に対して明確なる敵対行動を行った。まず確認すべきは、この本土政府調査団が最初から今回の結論を前提としていた事であり、さらに長がその中で唯一の民間人として、かつ最大の助教授として美里村民をはじめとする沖縄の人民を欺瞞的に説得する役割を負わされていたことである。それだけではない。この調査団自身が自衛官二名を含むことにより、自衛隊の沖縄派兵及びアジアでの帝国主義軍隊間の再編過程に対する布石となっているのであり、又自衛隊にとって生物化学兵器の輸送作戦の視察という軍事行動でもあるのだ。我々応化斗争委は、出発する前から安全だと嘯吹いていた長を沖縄へ行かせてしまった事をまず自己批判的に総括する中から、長が14日学校に出てくると直ちに追及を開始し、16日の追及集会を設定すると共に、全共斗、沖縄青年委、富村支援沖縄斗争東京行動委等及び連帯して長追及を続けた。

16日の追及の過程で長は、自らは文献を読んだだけであり、専門家ではないこと、又判断した材料は米軍から聞いたものである事、軍事機密のため不明な点があった事等を認めながらも、自らの知り得た範囲では「一体何が本当に分かったのか!」「安全と判断し、何がばんぞい毒ガス移送を行なわせようとしたのである。これ程の政治的行動をしておきながら、不思議にも長は、自分らが政治的役割を果したことを認めようとはしなかった。この所我々は、頑固切れのため、残念ながら明白な自己批判要求には到らなかったため、次回を本日21日に設定する事で了解したのである。しかしながら長は我々の追及におびえたか、昨日に到って集会出席を渋り始めたのである。論理的破産によって政府御用学者としての信用の失墜を恐れたのか、頭の悪さの露呈を恐れたか、何しろ我々は追及をやめることはできない。教室の使用規定、医良政府調査団に加わった農学部教授田村の出席問題についての長の泣きごとを次々と論破しきった。所が、長は破廉恥にも、学生対策で名を売った主任教授の米田に泣きついて、再度前言を撤した応化以外の学生・職員とは会えないと言い始めたのである。しかも自らの論理的破綻をその場の雰囲気のためにして、米田の助けを得て集会の主宰者である応化大学院親和会委員を個人的に攻撃し、逃亡をはかっている。もちろん我々は、この問題がきわめて一般的、かつ重要な政治問題であが故に、またこの追及を進める中から更なる連帯を求めるが故に、このような言いがかりを認めることができず、すべての斗う院生、学生、教職員、各学外の人も広く参加されるよう訴える。

我々は長に次のようにいおうではないか。もし本日の追及から逃亡するなら、それは明白に沖縄斗争に対する敵対行為であり、これまでの犯罪行為の上塗りをするものとして、我々は長に対して断乎たる制裁を加えるであろうと。

本日2時

五五号館52番結集

2時半

集会開始

一九七一年一月二一日

応斗委

別添

長（オサ）政府調査団参加の欺瞞性を露呈す！

一昨日、一月十六日の長助教授追及集会において全学の二百余名の先進的職員・学生・市民の激しい追及の前に、長はその犯罪的役割をさらけ出した。

すなわち、長は冒頭の経過報告において、彼がそもそも日本政府派遣調査団に参加した理由は、毒ガスを沖縄にそのまま放置することは良くないことであり、これを持ち出す際の安全性の確認のために訪沖し、もっぱら技術的問題についての答申を行い、政府調査団の報告のもたらす政治的影響についてはまったく考慮していない、という驚くべき発言を行った。

これに対しわれわれは、単純に技術的問題にのみの釈明にしがみつこうとする長を一つ一つ追及し、彼の欺瞞的、犯罪的役割を明らかにしていった。

まず第一点に彼は自分にとって沖縄とは何か、という意識が全くない。すなわち日本国民として「琉球処分」に加担し、沖縄を米帝に売り渡し、軍事基地としての米帝のアジア戦略の要め石とする代りに、日本の高度経済成長があったという沖縄に対する加害者としての意識が全く欠落している。この意識なくしては沖縄人民の斗争に対し何を語ろうと全て空語にしかすぎない。

次に彼ははたして毒ガスの「専門家」であろうか。彼はいかにも専門家ぶってマスタードガスの化学式や性質、ボンベなどについて述べたが、彼の知識はしょせん毒ガスの文献に目を通せば明らかになる程度のものであり、安全性確認のために使ったデータは米軍提出のものであり、彼自身の判断は「保存容器が安全のために重要であり、その容器はサビもなく非常に信頼性が高い。」という言葉にうかがわれるのみである。彼の釈明の唯一の拠り所のはずの技術的問題についてさえこの通りであり、科学者としての道義さえ地に堕ちているのである。

更に彼は政治的判断について一切の確答を与える事を拒否した。即ち政府調査団の中での唯一の民間専門家として安全性の検討を行ったことがいかに政治的に機能しているか。現地沖縄人民と何らコンタクトを取らずに出した結論の意味するものは何か。自衛官と同行した本土調査団がいかなる性格を持つか。これらの点に長哲郎は何一つ答える事ができなかった。彼は「私は少なくとも政治問題を交えて安全性を考慮したのではない。犯罪的行為をしたとは思わない。」というふざけた発言を行った。ここに至って長が専門バカでさえなく、バカ専門として、ないしは明確な政治的意図を持って調査団に参加したと断定せざるを得ない。

全学の斗う同志諸！長は「こんなに騒がれるのなら沖縄に行くのではなかった。」などと泣き事を並べている。我々は長はじめ腐敗堕落した東大教授共を徹底的に追及し、沖縄人民と連帯して斗っていこうではないか。

1・21(木)2.30～　からの第二回長追及集会に結集せよ!!

☆長哲郎の沖縄斗争への敵対を弾劾する!!

☆科学の名による沖縄人民の圧殺弾劾!!

☆自衛隊の沖縄派兵の露払い政府調査団への参加を糾弾する!!

1971.1.18　応用化学斗争委員会

1.21（木）2.30～

長追及集会　工5号館51バン

別添

No.1
跳躍
'71,1月21日
三年応斗委
情宣機関紙

科学技術を内視せよ！
科学技術を超克せよ！

長助教授に葬送の言葉

全ての応化3年の諸君！

我々の化工総論の講義を担当する長者部助教授が、沖縄毒ガス撤去に際して「安全」を確認するための政府調査団の一員として2名の化学兵器を扱う衛生官及び2名の政府官僚と供に渡沖し、毒ガス廃棄点において遂行を行なってきた。即ち、彼の安全に対する認識が全く科学的でないことであり、且つ、彼の一見、科学技術に忠実で故意をもって臨む態度そのもの、即ち、現実社会「階級社会」には何等貢献しえない「科学技術は没階級的である」なるイデオロギー（その点に於いて彼は自己を免罪していくのだが）及びそれにどっぷりとつかった長自身は米軍及び本土政府の一連の帝国主義的策動に没階級的幻想を付与し、それを積極的に助けてゆくものである。この事実を彼に認めさせ、自己批判させるとともに今後一切こういった行為をしないことに対する確約をさせることであった。しかし、この間の我々の追及に恐怖した彼は理由にならない理由でもって先週の土曜日の討論集会に於いて確約した本日、本庭日の追及集会に参加することを拒否しようとしている。我々は決してこの問題は個別応化の学友諸君だけの問題では無く、沖縄人民及び沖縄斗争を斗っている全ての人々に対する敵対行為としてある以上、集会に外部の人を含む全ての人々が参加しても当然であろうし、彼のいった大切な研究教育時間を割いてまでかかわった重要な問題であるならば同じ問題を抱う我々に研究教育時間に追求集会を行なうことに否をさしはさむことは出来ない。長が確約どおり本日の集会に現われない方らば我々には断固たる覚悟をもって臨むであろうことを声明する。それとともに、すべての応化学友諸君に本日の長助教授追及集会に積極的に参加していくことを訴えたいと考える。

☑自衛官とともに本土政府調査団の一員として自衛隊の沖縄派兵に参加し、日米軍事行動に参加したことを自己批判せよ！

☑そのことにより沖縄人民に対して犯罪を犯したことを自己批判し、沖縄人民に謝罪せよ！

本日 長助教授追及集会に結集せよ！

（三時半より 52号教室に於て）

（即ち米軍の情報のみによる「汚染の判断」を下した長の役割は科学的幻想を撒き散らす詐欺師＝米軍のスポークスマンを本質とするのである。）

米軍提供資料の提供をうけ、私が判断して安全と思った。
実際他の調査はしなかった。
500万つくるは、過去でそれ以上やっていると考えれば、1/500万の確率はさらに高まる。

沖縄の出先で2.3の事故例をブリーフィングを受けた

※ 森助手。 金武湾で海上投棄したという日本人従業員。

一四り早い撤去が望ましいと思った。

自分のしたことは正しいと信念を持っている。

住民地帯を通らぬ搬送路は可能である。

猛毒ガスは搬出されないと聞いている。∵化学兵器でない。
ばし毒ガスと考える。

軍編長からも予備知識を得た。

学者 安全といえば住民が安心するという新聞を拡げたのだろう。

事前に文献で読んで勉強した。

阿蘇、4年前 米で6ヶ月 訓練
甘利 1～2ヶ 米

化学中隊 4ヶ谷の教官
自分は外部者

非公開

一等 [illegible]
[illegible]
[illegible]